社会的ネットワーク論と日本型コミュニティの方途

Examination of a Social Network Theory, and the View of a Community of Japan.

コミュニティ福祉学科　志　田　倫　子

問題の所在

“日本社会は自分の属する集団（会社や家族）の「ソト」の人との交流が少ない”といわれている[(1)]。これを受けて、今日では「個人と個人がつながる」ような、「都市型のコミュニティ」ないし関係性をいかに作っていけるかが課題である、との見方がなされることも多い。

しかし、今でも我々にとって「コミュニティ」とは、自分、それを囲む家族、その延長上にある地域社会を意味していて、「わが町」というように自らと一体化するような人間関係が生まれる場所が「コミュニティ」であると考える傾向にあるのではないか。すなわち、「個人と個人がつながる」ことによって作られるアソシエーション[(2)]の活動（ボランティアやNPOの活動等）を地域社会で行うことは、コミュニティづくりとは別のものであり、そこで得られる「満足感・充実感」は、コミュニティづくりで得られる「安心感・楽しさ」とは、別のものであると考えることができるだろう。

本稿は、「地域社会におけるネットワークの集積、アソシエーションの形成によって本来のコミュニティづくりに近づいていかない、別の何かが必要である。」との問題提起のもとに、まずは日本で社会的ネットワークが発達しにくい理由を探り、コミュニティ意識がどのように形成されているのかを理解する。その上で、コミュニティ形成の意味を確認し、現在衰退しているともいわれる日本のコミュニティの方途を見出すことを目的とする[(3)]。

広井良典（2011）[(4)]をもとに、戦後の日本の状況と現代社会の課題を整理することで、背景をもう少し詳しくみてみたい。都市に移った日本人は独立した個人と個人のつながりという意味での都市的な関係性を築いていくかわりに、「会社」「核家族」という、いわば「都市の中のムラ社会」ともいうべき、閉鎖性の強いコミュニティを作っていった。年功序列や、終身雇用といった日本型経営にみられる会社や家族の有り方が大きく変化している現在において、「生きづらい」社会や関係性を生み出す背景となっている。例えば、自殺者が年間3万人を超えることが1998年以降続いているが、こうしたことの背景にも人と人との「関係性」の有り方が、何らかの形で働いていると指摘されている。このような現状をふまえると、新しい人間関係の構築が求められていることは明らかであるだろう。

そこで、人間関係の現状はどのようなものであるかを、データからみると、2005年に出されたOECDの報告書では、国際的に見て日本はもっとも「社会的孤立」度の高い国であるとされている[(5)]。この場合「社会的孤立」とは、家族や会社以外の者との交流やつながりがあるかどうかを

意味している。その結果、冒頭で述べたような日本社会は“自分の属する集団の「ソト」の人との交流が少ない”という点において先進諸国の中で際立っていることが実証されている。

1969 年の周知の報告書『コミュニティ―生活の場における人間性の回復』（国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会）以来、これまでも「人間性回復」のためにコミュニティ形成がなされてきたが、コミュニティづくりによって、「安心できる生活基盤」をつくることは 1 つの方法であろう。そこで、地域社会やコミュニティの形成を意味するいわゆる「まちづくり」は、実際にどのようになされてきたのか、手元の資料[(6)]によって時代の変化をみてみよう。

ここでは、全国のまちづくり活動賞を受賞した事例を比較して簡単に印象を述べてみたい。比較的古い事例として 1988 年版『ふるさとづくり’88』を、また最新の事例として 2012 年度版『あしたのまちくらしづくり』を取り上げてみたい。どちらも、その年に活動賞を受賞した活動内容が何点か掲載されており、「あしたの日本をつくる協会」によって編集、出版されている。1988 年の地域活動は「地域的」範域の意味が強く、活動している主体も主婦、地元自営業、高齢者などが、自分たちのまちを盛りたてるために、そのほかの本業（例えば、地元の自営業の仕事）を削って、活動に打ち込んでいる様子がみられる。本来、地域づくりは、地域で過ごす時間が長い人たちが盛り上がって携わる活動であったように思われる。

一方、2012 年度の事例をみてみると、震災復興のボランティアや NPO の活動も増え、地域のために行っている活動が多く含まれている。すなわち、1988 年度版における活動事例では、「自分たちの住む町を自分たちで盛りたてよう」という意識が強かったが、2012 年度版では「同じ地域に住む他の人たちのために、自分の時間を提供して活動を展開している」ケースが多いように思う。

ここで、これらの活動展開の変化について、「コミュニティの定義」にのっとって考察してみる。コミュニティの定義の整理として、よく引用される G.A. ヒラリーによるコミュニティの定義[(7)]に当てはめてみる。G.A. ヒラリーが、コミュニティの共通要素として指摘している「地域性」、「社会的相互作用」、「共通の絆」の 3 つの各々について、先の事例の変化をみると、まず「地域性」については、その範域が広がっている。また「社会的相互作用」と「共通の絆」は存在するが、その質が変化しているように思う。実際には、個人と個人が目的のために結びつき、活動をしているケースが増えているように思われる。すなわち、アソシエーションとしての活動が増加している。しかし、前述したように「日本が社会的孤立度の高い国」というデータとあわせると、こうしたアソシエーション的な活動を展開している人々は、数としてはそれほど多くはないといえよう。

「地域づくり」といったときに、「土着の人間関係による顔の見える活動」という基本的な考えを離れてしまうと、多くの人にとって活動への参加は、敷居が高くなってしまうのではないだろうか。ここで考えられることは、もう少し身近にコミュニティ活動があっていいのではないか。すなわち、生活の基盤として、愛着の持てる場としての地域社会が存在し、その基盤のうえにたって、新しい地域活動を展開していくことを考えるとき、今後どのような取り組みが必要となってくるだろうか。いわゆる従来型の町内会・自治会の活動（清掃、運動会、防災訓練など）以外に、新たな視点からのコミュニティ活動が展開されるにはどのような方法があるのか、この点に目を向けて考察して

いってみたい。このような視点からこれからのコミュニティの展開の方途を考察していくにあたり、次にまず社会的ネットワーク論について、その展開過程を簡単に整理、検討していく。

本稿では、まず、国民意識の形成の経緯をB. アンダーソンの『想像の共同体』(8)について、検討し、本論展開の分析の枠組みとして考察していきたい。また日本では社会的ネットワークが発達しにくいという理由を、日本人のパーソナリティとシカゴ学派による社会的ネットワークの展開過程の検討から探りたい。

1　分析枠組み

（1）想像の共同体

本節では、B. アンダーソン（1995）の前掲書『想像の共同体』によって、「国民」意識がどのように形成されてきたのか、その過程を理解し、本稿の分析の枠組みとしたい。

まず、著書の内容を概観してみたい。「国際連合（諸国民の連合）」の時代に生きる我々にとって、「国家」と「国民」は自明の前提となっている。しかし「国民（ネーション）」概念の混乱のなかで、「国民」を「想像の共同体（イマジンド・コミュニティ）」ととらえ、そうした「想像の共同体」が人々の心の中にいかにして生まれ、また世界に普及するようになったか、その世界史的過程を解き明かしている。以下、初期の展開の部分を、具体的な事例を引用してとりあげながら解釈してみたい(9)。

B. アンダーソンによると、「国民」は次のように定義できる。国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である。国民はイメージとして心の中に想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ることも、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐のイメージが生きているからである。

小説の中で出てくるＡ～Ｄという人物がいる。この中で、ＡとＤは一度も出会わない。では、ＡとＤを結び付けているものは何か。これは2つの相互補完的な概念によっている。第一に彼らは「社会」にはめ込まれている。これらの社会はがっちりと安定した現実性をもつ社会学的実体であり、したがってその住民（ＡやＤ）は、たがいに知り合うこともなく通りですれ違い、それでいてなお、たがいに関連し合っていると描写することができる。第二に、ＡとＤは全知の読者の頭の中にはめ込まれている。読者だけがつながりをみることができる。筆者が読者の頭の中に浮かび上がらせた想像の世界の新しさを示している。ある特定の年代の特定の月にマニラのまったく違う街に住む、おたがい知りもしなければ名も与えられない数百もの人々が晩餐会のことを話している。それは、ただちに想像の共同体を心のなかに思い浮かばせるものである。

「国民」を想像するという可能性それ自体が、古来の3つの基本的文化概念が公理として人々の精神を支配することができなくなったそのとき、その場所で、はじめて歴史的に成立したということである。その第一は、特定の手写本（聖典）だけが、まさに真理の不可分の一部であるというこ

とによって、存在論的真理に近づく特権的手段を提供するという観念である。キリスト教世界、イスラム共同体、その他の偉大な大陸横断的な信徒団体を生み出したのは、まさにこの観念であった。その第二は、社会が、高くそびえたつ中央 - 他の人間から隔絶した存在として、なんらかの宇宙論的（神的）摂理によって支配する王 - の下で、そのまわりに、自然と組織されているという信仰である。その第三は、宇宙論と歴史とは区別不能であり、世界と人の起源は本質的に同一であるとの時間観念である。これらの観念が一緒になって、人間の生を物の本性そのもののなかに植え付け、存在の日常的宿命性（とりわけ、死、喪失、隷従）に一定の意味を付与し、さらには、さまざまの仕方でそこからの救済を提供したのである。

これらの相互に連結した確実性は、まずヨーロッパで、そしてやがては他の地域においても、経済的変化、「諸発見」（社会的、科学的）、ますます加速化するコミュニケーションの発展の衝撃のもとで、ゆっくりと減退していき、宇宙論と歴史のはざまに荒々しい楔が打ち込まれた。そして、友愛、権力、時間を、新しく意味あるかたちでつなげようとする模索がはじまった。

こうした模索をなににもまして促進し、実りあるものとしたのが、出版資本主義であった。出版資本主義こそ、ますます多くの人々が、まったく新しいやり方で、みずからについて考え、かつ自己と他者を関係づけることを可能にしたのである。このように出版物の発展により、国境を越えて大書籍商たちの「インターナショナル」がはじまる。そして、これらの「出版語」は、国民意識の基礎を築いていったと B. アンダーソンは指摘する。

このように「想像の共同体」は、まず、出版によって結び付けられたこれらの読書同胞は、こうして、同一の出版語による結びつきにより、国民的なものと想像される共同体の杯を形成した。ここまで、B. アンダーソンの『想像の共同体』の論理を要約して紹介してきた。

（2）現代社会とコミュニティ形成の課題

B. アンダーソンによると、「国家」は実際には知り合うこともない多くの人々によって成り立っており、それらの人々に「国民」意識を根付かせていく背景には、出版物の発展がまずあげられる。同一の出版語によって結びつくことで、共同体としての意識が芽生える。このような「想像の共同体」としての結びつきは現代人の人間関係に特徴的なものであろう。ここでは、「同一言語で出版された書物を読む」ことで、一体感が生み出されてくることを最初の展開として説明している。つまり、「目に見えない何か」で結びついているのが特徴ともいえよう。

しかし、結びつきの象徴として「目に見える何か」を設定する場合も有り得るだろう。例えば、地域社会においては各市町村でアイディアがだされてコンテストが行われる「ゆるキャラ」や、世界文化遺産に登録された「富士山」など、各地域社会の一体感をあらわす象徴といえよう。

このように、目に見えない何かでつながっている「想像の共同体」を目に見える形にすることで、人々の実態のあるつながりを確認できないであろうか。それは、身近な生活の場である地域社会でこそ可能ではないだろうか。

2　農村社会で築かれた「日本人のパーソナリティ」

日本人は社会的ネットワークが発達しにくいという特徴があるが、その理由を解明するために、まずは日本人のパーソナリティを、きだみのる（1956）、神島二郎（1961）の「農村社会学」の見解[(10)]をもとに概観してみたい。

（1）日本人のパーソナリティの形成過程（要旨）

明治維新当時、人口の9割が農村にすみ、8割以上が農業人口であった。つまり、戦前日本人の8割は農村で生まれ育った。従って日本人は、農村社会にみられる地域共同体の中で生活をしてきた。こうした環境の下で日本人に特徴的なパーソナリティが形成された。すなわち、地域社会は人間形成の鋳型であった。

一定の地理的範囲、固定された村人のなかで、どのように人間関係は構造化されたのであろうか。特徴的な人間関係は、地主―小作、本家―分家といった主従関係、講組結合といった横（平等）の関係であるという。

すなわち、狭い地理的な範域の中で、主従関係、横並びの関係を保ちながら人間関係は組織化されていた。こうした構造を背景に、人間関係が保たれていたのである。

そこから、どのような農村的なパーソナリティが生まれたのであろうか。①家中心的な性格　②集団主義、保守的性格　③権威主義的性格　④閉鎖的性格である。このようなパーソナリティは、日本人の8割が農村で生まれ育ったことを考えると、日本人のパーソナリティとして特徴づけることができる。

（2）戦後の農業の変化（要旨）

戦後、農地改革が行われ農地の解放による小作層の自作化がみられ、不在地主が消滅した。小作として地主に従属していた農家は、耕作していた土地を自分のものとすることができたのである。産業化の進展により、第一次産業だけでなく、第二次•第三次産業が盛んになり、地域共同体であった農村社会は、その特徴を失い、人の流出が顕著にみられるようになった。

その結果、農村社会は過疎化し、主婦、高齢者などが残り農業を続ける兼業農家化し、若い世代は都市に移り住むようになったことは周知の通りである。

（3）考察

日本の農村社会は土地が狭く資源も少なかったため、顔をあわせて生活するという特徴が諸外国よりも色濃かったと考えられる。さらに、網の目のような主従関係のもとで細かな人間関係が形成されていた。そして、あくまでも地域社会は第一次集団であり、「そこにあるもの、ある人々を受け入れていく」という人間関係の有り方が見て取れる。

3　「アーバニズム論」と「新しいアーバニズム理論」の理論的整理

本節では、シカゴ学派の都市化の理論を整理することで、その理論展開のなかにみられる日本型

のコミュニティの特徴を考察していきたい。

（1）シカゴ学派のアーバニズム論

農村に住んでいた多くの人は都市に移り住み、これまでとは違った生活環境の中で暮らすことになる。その特徴は、シカゴ学派のアーバニズム論（都市的生活様式論）にまとめられる。まず、都市社会学のスタンダードといわれる、L. ワースのアーバニズム論[(11)]を、主に玉野和志（1994）[(12)]を用いてふりかえってみたい。

Ｌ . ワースのアーバニズム論の骨子は、次の通りである。ワースは、まず都市を①「生態学的な人口の量・密度・社会的異質性という側面」、②「社会関係・集団・組織などの社会的構成の側面」、③「都市に特徴的な集合行動や社会的性格＝パーソナリティ」、という 3 つの側面からとらえている。そして都市を①の生態学的な側面から定義して、「相対的に高い人口量と人口密度をもち、社会的に異質な人々からなる永続的な集落」としてとらえ、これを独立変数とする。そのうえで、他の 2 つの側面（②と③）を従属変数としてとらえた。

その内容をあえて単純化していえば、①人口の量・密度・異質性が高まるにつれて、②かつての家族・親族・近隣などの第 1 次集団におけるパーソナルな接触のもつ社会的意義が低下し、マスコミなどを通じたインパーソナルな、ステレオタイプ化した接触が優位となっていく。その結果、③社会解体によって大衆化（マス化）された民衆の集合行動が頻発し、神経症などの病理的現象をともなう都会人のパーソナリティが成立する、というのである。すなわち、伝統的な絆が解体して、原子化した諸個人があらわれると説明した。

「実験室としての都市」といわれた 2 0 世紀前半のシカゴの街の変化を観察し、都市化によって朴訥で素朴な田舎の風景から何もかも変ってしまったかのように思われた、都市の特徴を、Ｌ . ワースはこのように筋道立てて説明したのである。すなわち、都市の定義として必要なのは、独立変数とした①生態学的側面だけであり、残りの特徴である②、③はそこから派生して説明できる従属変数と考えた。

（2）サバーバニズム論の展開

玉野（1994）[(13)]によると、1920 年代から 50 年代にかけてのアメリカでは、過度に人口が集中し環境が悪化した都市部から上層の中産階級が脱出し、郊外の庭付き一戸建て住宅から自家用車で都心のオフィスへ通うという生活様式が一般化しはじめる。そこでは、アーバニズム論における社会解体というイメージからはかけ離れた、階層ごとに秩序づけられ高度に組織化された郊外生活が展開しはじめる。これがサバーバニズムとよばれる新しい都市の生活様式である。

アメリカにおけるサバーバニズム論では、アーバニズム論の都市イメージとは異なって多くのボランタリーアソシエーションに参加し、友人関係などの社会的ネットワークを豊富に維持している郊外生活者が問題にされた。

シカゴ学派の第一世代であるＥ . Ｗ . バージェスが提唱した同心円（地帯）理論[(14)]によると、都市は中心から外側に向かって同心円上に拡大していくことが特徴であることが指摘されている。そして、階層によってすみ分けが行われ、郊外との境目である一番外側に住むのが一戸建てで車を

もち、都心のオフィスに時間をかけて通うホワイトカラー層であるとされている。

E.W. バージェスによれば、シカゴにおける都市化は「何もないところから拡大を続けた」という特徴があり、そのことで、綺麗な同心円を描くことができたと言われている。このことからもわかるように、郊外に住むホワイトカラー層も全てが新来住層であり、何もないところから人間関係を構築しなければならなかったところに特徴があるだろう。そうしたゼロからのスタートというのが、大きな特徴であるといえよう。

（3）C．S．フィッシャーの下位文化理論

アーバニズム論が都市社会学のスタンダードといわれるのは、その後さまざまな理論的検討が行われるからである。新しいアーバニズム理論とよばれる諸理論の中で、下位文化を社会的ネットワークとの関連で構造的に記述しようとしたC．S．フィッシャーの理論[15]の論旨をみていきたい。C．S．フィッシャーがコミュニティをネットワークの集積としてとらえる方法は、日本でもこの後、高まりを見せるからである。

松本康（1992）[16]によると、C．S．フィッシャーの理論の骨子は、他の条件にして等しい場合、人口の集中は分業の発達と社会的ネットワークの分化を促進し、それを基礎として、文化的異質性が増大するというものである。C．S．フィッシャーの理論を根底から支えている論点として「都市における社会的ネットワークの分化」をあげている。C．S．フィッシャーは人びとの取り結ぶ社会的諸関係を社会的ネットワークとして記述する。アーバニズムは、接触可能な人口量を増大させることを通じて、社会関係の選択範囲を広げ、その結果、ライフスタイルを共有する人びとの同質的なネットワークの形成を促す。とくにマイノリティにとって、このことは当てはまる。ここに下位文化生成の理論的根拠があるのである。

ここでC．S．フィッシャーの展開について要約すると、L．ワースがアーバニズム論の中で、独立変数として定義した①人口、密度、異質性のうち、「異質性」に関しては独立変数ではなく従属変数ではないかと指摘する。つまり、人口、密度が増大することによって、社会的ネットワークが形成されるようになり、分業化が進展する。そのことで、異質性が高まる。すなわち、移民が集まってくる。そこで、マイノリティすなわち少数民族が形成する下位文化が形成される。

また、フィッシャーは、社会的ネットワーク論のアプローチを使って、「コミュニティ衰退論」批判を展開[17]していることが、松本（1992）によって指摘[18]されている。すなわち、都市部において親族関係が衰退するのは、都市生活が親族に代わる選択肢を用意するからである。その内容として「レクリエーションのような制度的な代替選択肢―を用意しているということである」[19]が、このことは親族そのものの消失を意味するものではない、と松本（1992）は指摘する。

マイノリティにとって家族・親族をはじめとした同じ民族によるネットワークは、マイノリティにとってのコミュニティのようなものであり、それを考えるとコミュニティが衰退したわけではないという主張の意味がわかりやすい。家族の機能の多くが社会化することで、レクリエーションが都市の娯楽として取り入れられるのは容易に理解できる。

（4）諸理論の検討

これらの理論に検討を加えてみたい。アーバニズム論に関しては、後の批判的検討があるにせよ、「実験室としての都市」としてのシカゴの街を観察し、実証的に研究した先駆的な成果としては評価することができよう。

「サバーバニズム論」は、都市が拡大して郊外の生活が定着するまでには時間的な経過があったと思われる。従って、アーバニズム論とは時間的差異をもって展開されたととらえることができよう[(20)]。

同じように、フィッシャーの下位文化理論に対しても、アーバニズム論の批判としてとらえられるのではなく、時間的な経過によって、フィッシャーの理論が適応されるようになったと考える方が相応しいのではないか。都市化の要因としてあげられるものは、「産業化」と「人口移動」だと言われるが、その 2 つの条件が満たされたのは 20 世紀までと言われている。田村明（1997）をもとにまとめる[(21)]と、産業革命時の英国、欧米諸国、日本や社会主義国における都市化は、この 2 つの条件によっておきたと言われている。しかし、その後の発展途上国における都市化は産業化が伴わないものだと言われている。人口が爆発的に増加することにより、田舎で既存の農業などに従事していては家族を養えない人々が、都市に行けば仕事があるだろうということで都市に移り住むことが指摘されている。

こうした産業化が伴わない都市化においては、フィッシャーの下位文化理論は当てはまることがわかる。すなわち、「社会的ネットワークの発達」と「分業化」によって、マイノリティにとって仕事につきやすい環境が整っている。すなわち、「地域の人がみんな土着の顔見知り」といった地域社会ではなくて、新しく移り住んできた人が、人間関係に組み込まれやすい仕組みが整っている訳である。そして、分業化によって、仕事の内容も単純な作業になっている。こうした中で、移民は都市に移り住み、自分たちマイノリティのネットワークを形成することができるのではないか。

このように考えると、２０世紀前半のアメリカの都市化の中でも、ある一定の時期になると産業化の傾向には歯止めがかかり、その中で「アーバニズム論」よりもフィッシャーの「新しいアーバニズム理論」を用いたほうが、実態把握がしやすくなったと考えるのが適切であると思われる。

終章　日本のコミュニティと「想像の共同体」

（1）日本のコミュニティの特徴

ここで「問題の所在」、2 章、3 章の内容から、日本のコミュニティの特徴をまとめてみたい。

まず問題点を整理してみると、「問題の所在」で述べたように、日本社会における根本的な課題は、「個人と個人がつながる」ような「都市型のコミュニティ」ないし関係性というものを、いかに作っていけるかという点に集約される。しかし、これが容易にできないところに問題があり、その理由を探ってきた。

第 2 章では、農村社会学の成果からわかるように、日本の狭い土地での農村におけるパーソナリ

ティの形成が問題ではないか。嫌でも顔と顔を突き合わせた人間関係が出来上がっていて、そこではわざわざ積極的に人間関係を新たに構築しようという方法を知らないことを指摘してきた。

第3章では、社会的ネットワークが形成されてきたアメリカのケースを諸理論を検討するなかで振り返ってきた。その結果、2つのタイプに集約された。まず第1に、サバーバニズム論でみられる、全く人間関係がないところから新しいネットワークを構築していく場合。第2に、フィッシャーの下位文化論にみられるように、多民族国家の中で民族ごとによるネットワークを形成する場合である。これらの所説からみて日本のコミュニティはこれらのタイプには当てはまらないといえよう(22)。

（2）日本の人間関係の特徴

第3章で検討したアメリカでの社会的ネットワークの形成の土壌は、日本の社会には当てはまらない。竹田美知（2010）(23) によると、都市の大学への進学による若者の遠距離移動が顕著であった時代から、大学進学人口は増加したが地方大学の増加によって地方都市への近距離移動が増加している。また交通手段の進歩や情報化の進展によって、若者にとっての「ひとり暮らし」がいつでも家族と繋がる「ひとり暮らし」に変化した。さらに、「晩婚化により、単身時代の長期化とひとり暮らし」の傾向がみられる。

すなわち、これまで検討してきたような、社会的ネットワークを形成する際にみられる「新しいネットワークを構築する必要性」がみられないわけである。大学や職場に通い、あとはいつでも家族と繋がる「ひとり暮らし」をしているといえよう。こうした現状を考えると、“自分の属するコミュニティないし集団の「ソト」の人との交流が少ない”といった日本人の特徴を変えていく要素が見当たらないように思われる。

（3）日本のコミュニティと「想像の共同体」

それでは、日本のコミュニティをどうとらえたらいいだろうか。現状をさらに具体的に考えてみると、我々は地域社会と直接触れ合う機会は少なくとも、地域のことを全く知らない人はいないのではないか。同居あるいは実家の家族（特に母親）から、近所の人の話や噂話は聞いている人がほとんどであろう。すなわち、家族と交わす会話によって、地域社会、町内会・自治会の一員であるという感覚を持っているのではないか。このような言語による会話によって、実際に活動はしていなくとも、地域社会の一員であるという「意識」が形成されて、いわゆる「想像の共同体」ともいえる地域の人々との一体感が保たれているといえるのではないか。こうした意味では、日本の地域社会にはコミュニティは崩壊していないのではないか。

そこで、「想像の共同体」として結びついている日本のコミュニティをいかに目に見えるつながりにしていくか、この問題を今後実証的に考察していきたい。

（注）

（1）例えば、広井良典　2011『コミュニティを問いなおす―つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書 p17　など。

（2）コミュニティとアソシエーションの対置概念は、周知のとおり、ロバートM.マッキーヴァーによってなされた。ロバートM.マッキーヴァー著（中久郎・松本道晴監訳）1975『コミュニティ』ミネルヴァ書房を参照。

（3）広井、前掲書（1）、p19 によると、人間のライフサイクルからみて、「子どもの時期」と「高齢期」という 2 つの時期は、いずれも地域への「土着性」が強いという特徴をもっているといわれている。現在は高齢化社会によって、地域との関わりが強い人々が一貫した増加期に入る入口と考えられることが指摘されている。従って、現代社会は、地域社会の有り方を改めて考えてみる必要性がある。
（4）広井、前掲書（1）、p9-p10。
（5）広井、前掲書（1）、p17。
（6）あしたの日本を創る協会編　1988 『ふるさとづくり’88』 あしたの日本を創る協会、あしたの日本を創る協会編　2012 『あしたのまち　くらしづくり　2012 年度版』 あしたの日本を創る協会、この 2 冊の内容を概観した上で比較している。
（7）Hillery，George　A.，“Definitions of Community：Areas of Agreement”Rural Sociology，Vol 20，No.2，P111-p123（山口弘光訳 「コミュニティの定義―合意の範囲をめぐって」鈴木広編　1978『都市化の社会学（増補）』誠信書房　、p 303- p 321）を参照。G．A．ヒラリーは、94 編におよぶ文献を詳細に検討してコミュニティの概念を探ろうとした。その結果、この 3 点が共通していることを結論づけた。
（8）ベネディクト・アンダーソン著（白石隆・白石さや訳） 1995 『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』 リブロポート。
（9）B．アンダーソン、前掲書（8）、主に p10-p70 を参照。
（10）きだみのる 1956『日本文化の根底に潜むもの（自然村（ムラ）の秩序原理をもって）』大日本雄弁会講談社、神島次郎 1961『近代日本の精神構造』岩波書店。
（11）L．ワース著（高橋勇悦訳）「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広訳編　1978『都市化の社会学（増補版）』誠信書房　所収。
（12）玉野和志「第 9 章　都市的生活様式の展開」高橋勇悦・菊池美代志編著 1994『今日の都市社会学』、p 172- p 186。
（13）玉野和志、前掲書（12）、p 177- p 178。
（14）Burgess, E. W .,“The growth of the city”, in The City, chapter2, The University of Chicago Press, 1925,（大道安次郎・倉田和四生訳 1972『都市』鹿島出版会）
（15）Fischer, Claude S.,“Toward a Subcultural Theory of Urbanism”A.J.S.80：1319-1341,1975（奥田道大・広田康生訳「アーバニズムの下位文化理論にむけて」『都市の理論のために』1983　多賀出版）。
（16）松本康「第 6 章　新しいアーバニズム理論」鈴木広編著　1992『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房、p 133- p 157。
（17）次の 2 本の論文を参照。
Fischer, Claude S.et al.，Networks and Places：Social Relations in Urban Setting, Free Press, 1977.
Fischer, Claude S.，To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City, University of Chicago Press, 1982.
（18）松本、前掲書（16）、p 147。
（19）松本、前掲書（16）、p 150。Fischer（1982） 前掲書（17）p82 からの引用である。
（20）玉野、前掲書（12）、p177 によると、「近代的な都市生活が徐々に定着し、ある程度の成熟期を迎えるようになると、アーバニズム論が提出した社会解体のイメージにはそぐわない都市的生活様式に関する実証的な知見が指摘されるようになる」とし、その知見としてサバーバニズム論を紹介している。
（21）田村明 1997『現代都市読本』東洋経済新報社、p12-p18。
（22）現在、日本に住む外国人に関してはこうした理論に当てはまる部分があると思われるが、日本人に関しては当てはまらないということである。
（23）竹田美知「Ⅴ－ 7　ひとり暮らしをするということ」神原文子・杉井潤子・竹田美知編著 2010『よくわかる現代家族』ミネルヴァ書房、p76-p77。